

ずいひつ No.120

2016年7月25日発行

(内線 1621)

学生に未製本の雑誌は貸出不可。これは愛知学院ではない私の母校でも同じであった。大学に入り図書館で『広告批評』を見つけ、意気揚々とカウンターに持って行って「不可です」と言われた記憶がある。『広告批評』はマドラ出版発行の月刊誌で、そのタイトルのままにあらゆる広告について批評していた。2009年に休刊となっているが、当時私が借りたかったのはCD-ROM付きの世界のコマーシャル特集だった。

雑誌を借りようとした学生さんに「そちらは貸出しできません」とお断りをして、ふとそんなことを懐かしんだが、今なら世界のCMを見ようと思えばいくらでも見られる時代になった。2005年にYouTubeが誕生してから十年以上経ち、内容もあらゆるものが充実し、もはや見たいものはあって当たり前のようにになっている。そして思い立ったら手のひらに収まるスマートフォンですぐに再生できる。CD-ROMより高画質で。そんな時代。

数年前にApple社のiPad miniのコマーシャルを見たときに懐かしさが押し寄せたが、何を思い出しているのかが私自身わからなかった。とりあえずBGMを知っている。何かの映画の曲だと思う。だから私は何人かに何の曲かわからないか尋ねた。けれど知っている人には出会えず、あっさりといわれたのだ「目の前のスマホで検索してみたら？」と。私自身、検索をすれば答えがあるかもしれないとは思っていた。でもそれをしたら負けな気がしていたのは、本能的にそれは父の思い出と繋がっていると思っていたからである。映画が好きだった私の父は十年前に他界していたので、どこかでその答えを教えてくれる人に出会えたら、父に再会できた気分がするだろうと期待していたのだ。そんなファザーコンプレックスが軽く打ち砕かれ、おっしゃるとおりに検索すると、「 iPad mini CM ピアノ 映画」、簡単にグーグルは教えてくれた。

曲名は『Heart and Soul』。若きトム・ハンクス主演『BIG』の名シーン、社長と大きな鍵盤のおもちゃを足で連弾して奏でた曲だった。幼い時に家族みんなで、日曜洋画劇場で見た楽しいシーン。父ならすぐに教えてくれたはずだ。そのシーンが見たいなと思ったら、丁寧にそのシーンだけカットされた動画も簡単に見ることができた。懐かしかったしすっきりしたけど、なんだか悔しかった。

自分のときはこうじゃなかったといってしまうと、時代が次の世代のものに移り変わったわけで、年をとってしまつたと切なくなるのだが、これが当り前の若い世代には、あらためて「正しいことと正しくないこと」の区別はちゃんと身に付けていてほしいと思う。映画は監督や俳優などその道のプロが集まって、巨額のお金を投資する人がいて出来上がる。その映像は個人が複製してはいけないとみんな知っている。だけど誰かが切り刻んでそこに存在させているからイイネといたくなってしまう。それをSNSで友達に伝えたらイイネってたくさん共感してもらえる。楽しくてそのうちに自分でも切り刻んでここがイイデショといたくなってしまう？この行動、抵抗を感じない人も多いのでは？ライブ会場に行くとスーツを着込んだ人が怖い顔で「会場内すべて撮影禁止」と掲げている。にも拘らず席に着くとセットを撮ったり、友達と自撮り撮影を楽しむ若い人の姿は必ず見かける。その写真をSNSにあげるのかな？大丈夫かな？その軽いノリが炎上を起こす大惨事になることもある。だって、当り前だけ違法だから。だけど、かつて宇多田ヒカルは100万のフォロワーの前で「ダウンロード違法化がなんぼのもんじゃない カーチャンのレア映像を保存したかったんじゃ(≧(エ)≦)」と言い放った。権利を守ってもらう人も同じようにYouTubeを楽しんでいて、今後のエンターテイメントの形を模索しているなら、法律は変わっていくこともあるかもしれない。現にライブ会場での撮影は、自分たちの記念撮影だけでなくアーティストの演奏すら宣伝になると撮影許可している国の方が圧倒的に多い。韓国ではプロ機材での撮影をファンがするから面白いことになっている。時代は変化していくからこそ、いま正しいことをきちんと把握していよう。

さて、図書館でもスマートフォンの普及と同時に本を撮影する人が増えた。それを注意しないのは「私利利用のため」であれば著作権違反ではないからである。つまりそのデータを友達と共有したら違法。このこと、ちゃんと知った上で撮影していませんか？ **正しくスマートライフを送りましょう**

(図書館生活委員)